「本物志向時代来る」

石田　哲史

バブル崩壊後各企業の設備投資は現在も尾を引いています。ソフト産業についても少なからず影響を受け、客先からの受注金については厳しいコストダウンの嵐の中でもまれています。また従来に比べ客先の監査基準も厳しく安く高性能のものを短納期でという一見矛盾と思われていたことがソフト開発の現場では現実となってのしかかってきています。一方ここ数年でソフト開発の環境も変化しており、従来のホストによる開発からWindows95／NTを利用したC／Sによる開発が一般的になってきました。

当社のソフト開発も時代の流れに合わせ新技術への取り組みを続けてきました。特にCASEについては、従来のソフト開発から脱却を図るために重要なテーマで、かねてより検討試験運用を繰り返してきました。検討当時（平成4～6年）はCASE製品も少なく製品自体が高額であることと、動作環境も高機能UNIXでないと動作しないという状況でした。それでも試験運用をしながら本格導入を目指しましたが、CASEの持つ設計理論が当社のソフト構造に適合させることが難しくCASE導入を一時断念せざるを得ない状況になりました。

そのときたまたま当社のソフト開発を依頼していたテスコ（株）から渡辺氏が来社し、ZIPCの構想について聞くことができ“まさにこれだ!!”と感じました。設計手法的には当社で使用していた状態遷移表を利用しており、オンラインシステムでの使用実績と設計経験が豊富であったことから導入に向けての評価を開始しました。

評価の結果CASEを多くのSEが使用するという面では多少課題もあらいましたがおおむね満足する結果が得られ、CASE推進に拍車をかけることができました。また課題については、当社のソフト開発に特化している部分が多いことから当社版ZIPCとしてCASEのカスタマイズを実施することにしました。（リバースエンジニアリング機能、ユーザーカスタマイズ型オンラインマニュアル機能、３次元遷移機能）。現在ではCASEを利用するのが当たり前になり、高度利用者については、リバース機能により既存ソフトを利用したプロトタイプ開発を行なっており、工期短縮とユーザーへのサービス強化が図られています。
現在は、当社のNKZIPC（テスコ（株）と共同開発）をCATSから販売するようになりました。

これからも客先からの要望はより高くなり、それに応えていくことがメーカーの生き残る道になっていくのではないでしょうか？

いわゆる「本物志向の時代」の幕開けです。

石田　哲史（いしだ　てつじ）